

はなかつたものです。今でも山奥ではキセルを木か岩で作つて使っています。少しずつ海岸近くに住むようになり、生活の道具や衣服もぜいたくになり、今では私たちは木綿の衣服を着、真鎗のキセルを持つようになりました。それだからアイヌの気力は衰えて力も弱り、正直で飾り気のない素朴さも失われつつあるのです」と話していたが、いかにもその通りだと感じるところです。

またこの地では石の矢じりも数多く出土しますが、すべて黒曜石でつくられたものです。このことは尾張国風土記に「天種子命が三角の石弓と玉の大羽矢を持つて……」とあり、中国の歴史書でいうところの「肅慎氏の楛矢石砮」、



大昔の人たちが使った石器類

狩りや漁のほか、木の実などをすりつぶすなど、調理にも使った。帯広百年記念館で撮影。

文選の「文鏡碧砮」、中国の地理書「大明一統志」にも「黒龍江（アムール川）の下流域から見つかる石は堅く鋭く、矢じりに適している」とあるように、この黒曜石も硬くて鋭いことは他とは比べ物にはならないので、アイヌたちはさまざまに利用したのでしょうか。ことし（1860年）、日本で初めてアメリカに派遣された渡航使節団の中に、豊後杵築の佐藤恒蔵秀長氏が、アメリカから石の矢じり2、3枚を貰つて帰つてこられましたが、こちらは白く、やはり非常に硬くて鋭い石でした。形はさまざまありますが、この地と同じ石器でアメリカ人が言うには「大昔に使われていたものです。今も時々出土します」とのことです。そうするとはるか遠いアメリカの地でも大昔に石器をつかっていたのだと思いました。

さて、リフレンライから少し下るとユツクシフト川、農野牛川、カツケン川、そしてトヒヲカに2軒の人家がありました。止若からここまで来ると、陸路はなく、川筋を舟で行くしかありません